

J I A 市民大学講座
2001 まちづくりセミナー「21 世紀の街づくり」
特別フォーラム

テーマ：「大阪の地域ルネッサンス “大阪流” 街の再生」

日 時：平成 13 年 9 月 27 日（木）18：00～20：00

場 所：Y K K a p 会議室

コーディネーター	高口 恭行 氏（一心寺住職・建築家）
パネリスト	土居 年樹 氏（天神橋三丁目商店街振興組合理事長）
	成松 孝 氏（長堀 21 世紀計画の会理事）
	芦田 英機 氏（豊中市政策推進部部長）

開会の挨拶

委員長： 本日は、J I A の近畿支部大会の特別フォーラムにお越しいただき、有り難うございます。

J I A 近畿支部の都市デザイン委員会は、毎年、市民大学講座として年に 6 回、まちづくりセミナーを開催していますが、本年は「街の再生」をテーマに、都合 6 回開催致します。

本日は、特別に支部大会に合わせ、特別フォーラムとしてシンポジウムの形で開催させていただき、「大阪の地域ルネッサンス “大阪流” 街の再生」というテーマで、特に中心市街地や商店街等におけるまちの活性化、再生にご尽力されている方々をお招きして、地域の活性化推進の内容をご報告いただきながら、有効な戦略、展望について語っていただきたいと思っております。

進行の概略説明

高口： 私は、大阪の天王寺区にありまして一心寺の住職をしております。住職は、千年来決まり切ったお経を優雅に唱えていると、それで鯛が鳴くということになっていますが、何の因果か、建築家を標榜しております関係で、時にこのような仕事をしなければなりません。寺にいる時は真面目にやっております

ので、皆様もお参り、あるいは納骨の際には、「あのいかがわしい男の寺」と思われないうちにお願い致します(笑)。

本日のシンポジウムは、「地域ルネッサンス」という肩書きが付いていますが、「“大阪流” 街の再生」をテーマにして、お話を伺うことになっております。

土居さんは天神橋三丁目商店街の方で、ご多分に漏れず、商店街というものは元気がなくなっていますが、その中でこれに敢然と立ち向かった方が土居さんです。スポットライトが当たらなければならないような方であり、よく知られています(笑)。

成松さんは、人物としてはよく存じ上げませんでしたが、私の家内に「長堀を手掛けた人」と話しましたところ、「あそこは凄い」と言っていました。つまり、御堂筋や心齋橋筋のパワーダウンが心配されていた中で、御堂筋と長堀通の交差点の一角に、続々とスーパーブランド店が立地し始めました。その後ろにいて関わったのが成松さんなので、やはり、ここでスポットライトが当たらなければならないわけです。それについてお話を伺います。

芦田さんは、やや状況が違い、豊中市にお勤めです。役所は縦割り行政で、まちづくりのような小さな話には対応しにくい所が多い

のですが、どういうわけか、役所の中で役所らしからぬ、オーバーに言えば、小泉純一郎的な人が一人いたということで、やはり、ここで照明が当たることになるわけです(笑)。

そういう感じで、本日はお三方にお出でいただきました。

私は、一心寺を中心として、かつては輝かしかつた寺町に何とか今日的な状況の中でスポットライトを当てたい、当たって然るべきだと考えながら日々暮らしています。時間があれば、私の事にも触れたいと思います。

さっそく、お話を伺いたいと思いますが、まず、それぞれの所で何が起きているのか、あるいは起こってきたのかということをご自己紹介的にお話しいただき、その後、何をしたらそうなったのかということについてお話しさせていただきます。そこで時間が一段落しますので、既に会場の皆様にお配りしておりますアンケート用紙に、ご質問を書いていただいて、その後、その質問にお答えいただくという形で進めさせていただきます。宜しく、お願い致します。

街づくり活動の発表

1. 街づくりの現状

天神橋筋商店街の問題と課題

土居： 天神橋筋の町商人(まちあきんど)と称しております土居です。最近、物が売れませんが、こういう所に来て顔ばかり売っています(笑)。

昨日は、近鉄が優勝して、大阪に少し活気が出てきたように思いますが、近鉄と言うとやはり南で、北区はやはり阪神です。その阪神が駄目なので、南と北を比べると北の方が弱いのですが、それでも、近鉄が優勝して南から段々と火の手を上げてもらい、一番燃え盛っている所を北に持って来てくれたら、それで景気が回復するかもしれないと思ってい

ます。

<自力で再生できない商店街>

今、商店街は、本当に大変です。90数%の商店街がもう駄目だと言われ、商店街ではなく、「消店街」と書く時代になってしまいました。日本全国で良い所は2%だけです。それくらい、商店街は駄目になっているのです。

駄目になった原因は何なのでしょう。

昭和20年に大阪は焼け野原になりましたが、その後、すぐに街が復興しました。天神橋筋商店街は人も家もなくなったのに、人々は戸板にシャツを並べて商売を始め、家族も養って、家も建てて、街並みをつくった、そういう時代が街を再生したのです。

その時、その人たちが行政の力に預かったのかということ、決してそんなことはありません。皆、自力で懸命に街を再生したのです。

しかし、戦後二代目になった頃から、少しずつ街がおかしくなってきました。それなのに、「まあ、いいや。そのうちにどないかなるやろ」とあまり気にもせず、そのうちに益々おかしくなって、終いには商店街も街の中もガン細胞に侵されてしまいました。

それに対して、二代目の商人は何をしたかということ、行政に助けを求めました。そういう、自分で金を出してガン細胞を治すのではなく、人に手を差し出して金を貰って助けて貰うという甘えの構造が、あちこち益々おかしくしてしまっただけです。

そうすると、三代目に継げと言っても、三代目はできません。それで街が再生できるのでしょうか。ITの世界で世の中はおかしくなっているのですから、そちらへ行ってしまわないようにするには、どうすれば良いのかということなのです。

<街残しを忘れた企業や行政>

また、最近、街が壊れています。誰が壊したかということ、商売人だと思います。特に、企業が街を駄目にしたのではないのでしょうか。

これはあくまで私の考え方ですが、ニュー

タウンと称して、田んぼの真ん中にショッピングセンターやガソリンスタンドや駐車場をつくったら街になるのでしょうか、ベッドタウンと言って寝るだけの街をつくったら街になるのでしょうか。街づくりと言うと、それが街づくりのような錯覚を起こしているのではないのでしょうか。街づくりをする前に、街残しをしていたら、もっと日本の街は再生していたとつくづく感じています。

今、日本では色々な犯罪等、私たちの若い頃には考えられなかったような事が起こっています。そのことは、街の再生に問題があるのではないかと思います。

商店街の人は常に街守りをしていますし、人との触れ合いもしていますが、そういうものを全て排除したのが、企業商法のような気がします。そういうことで、街が直せるとは思いません。誰かが声を大にして、「街の再生を頑張ろう」と言うべきですが、行政ができるとも思えないし、私は、行政は後からついてくるものだと思っています。最初にキャッチして、街直しをしていく人たちがどこかにいなければ、世の中は駄目になるのです。

大阪の街は、行政によって、水の都の川が埋められて車社会になり、住居表示で昔の名前が全部消され、北区の東側はほとんど天満という名前が付いています。また、ドーナツ現象で人が追い出されて、一時期、「商売だけ大阪でしなはれ、住むのは余所へ行って住みなはれ」という時代がありました。地下鉄ができたターミナルが全部消えてしまい、地上へ出てこない社会ができる等、考えてみると、行政も、してはならないことをたくさんやって来たのではないかと思います。

今、行政は、商店街に空き店舗が出てきて大変だから、空き店舗を借りる人がいたら家賃を出すという制度を設けていますが、「そんなことで商店街の世直しができるか」「街の世直しができるか」と思っているわけです。もっと真剣に考えて、ちゃんとした道を歩んで来

なかったツケが来ているような気がします。

では、その世直しを誰がするのかと考えた時に、建築家がもう一度街のことを考え直して、街のあり方、街のソフトの面から建物を建てる、そういう仕組みができないかと痛切に感じながら、25年間色々なことをしてきました。それについては、後程、お話ししたいと思います。

長堀を中心とした大阪都心の問題と課題

成松： 土居さんのような方が、今、大阪の街づくりを進めておられるということで“凄なおっさん”がいて良かったと思っています(笑)。先程、控え室で、土居さんが「商店街は消店街」と言われましたので、私は「笑店街にしましょう。楽しい街をつくっていきましょう」と駄洒落合戦をしていたところです。

< 国際集客都市としての受け皿の不足 >

一方で、磯村市長は「大阪は国際集客都市にしよう」と言われました。これは正解だと思います。特に重厚長大の時代でもないし、大阪にはそういう産業もありません。ファインケミカルが頑張っていますが、むしろ、街の充実を進めて、特徴のある楽しい街をつくり上げることによって、国際集客都市へ移行していくことが、将来の大阪を考えた時に有効な手段ではないかと思います。

ところが、現実を見ますと、特に都心に国際集客都市の受け皿が見当たりません。先のオリンピックの状況を目の当たりにして、お分かりだと思いますが、全般的に全く盛り上がりませんでした。

それから、大阪市が自慢するように、今まで世界的、あるいはアジア的な国際会議が数多く大阪で開かれています。それが経済効果に発展していません。つまり、一度来た人にリピーターになっていただくという観念、そういう街づくりが、残念ながら今の大阪、特に都心には出来ていないのです。ですから、そういうことを幾ら行っても、一度来て「また、

行ってみよう」ということにはなりません。

世界的な知名度では、日本と言えば東京、知日派の方で京都、変に有名なのが広島・長崎で、大阪は残念ながら世界であまり知られていません。「大阪なんてどこにあるんだ」と言われてしまいます。国内では日本第2の都市と言っていますが、それが世界には通じていないという部分もあり、国際集客都市の核的な部分、楽しい部分を街の中にもっとつくりたいという動きをしています。

< 由緒ある土地に生まれた企業町会 >

場所は、少し前の言い方をすれば、心齋橋筋北詰です。つまり、心齋橋の北の外れが長堀通で、南の吹き溜まり、南から落ちこぼれる寸前のような表現が 20 年前にはあったわけです。

調べてみますと、長堀というのは、太閤秀吉の時代、運河をつくり、それが徳川の代になって朱印船の基地になったということで、堺あるいは長堀辺りから西の新しい文明が上って行ったわけです。ですから、あの辺りには近代の新しい商店が建ち並んでいました。住友家の本家が長堀通の松屋町の手前の東側にありますが、そこに当時としては世界一大きな銅の製錬所もありました。そういう大変に由緒ある土地柄でもあります。

そういう中で、私たちが他の団体と若干違いますのは、企業町会であることです。企業町会というのは、色々な形の企業が会員として集まっているもので、ガソリンスタンドもあれば、飲食店もあり、あるいはソニー、大丸、そごう、出光興産もあれば、法律事務所から会計事務所まで、ありとあらゆる企業が約 170 社集まっています。

大変便利なのは、各企業がその分野のスペシャリストだということ、スペシャリストがたくさんいるということです。したがって、何かしようという時に、素人が集まって色々やっている、スペシャリストたちが見るに見かねて手伝ってくれるという、ある種の

神風が過去 20 年の間に何度も吹きました。そうして、今まで進められてきたというわけです。

街づくりに対する豊中市の取り組み

芦田： この会の世話役に誘き寄せられて出てきましたが、未だに出てきた理由が分かりません。私は卒にはめられた公務員生活を大過なく 30 数年過ごしてきた人間で、実は 9 月の市議会を抜け出して来ているので、あまり目立った発言をすると明日からの議会に問題が出てきます(笑)。

土居さんは「茶碗で飯が食べへん」と言いながら、「遠き(陶器)未来では、時期(磁器)が来たら、面白い街づくりで商店街を復活させたい」と言われていますし、成松さんは、 $3 \times 3 = 9$ (さざんがく = 店名のサザンクロスにかけて)の掛け算で長堀と心齋橋の街づくりをされています。高口さんは、才能を独り占めにされているので、一心(一心寺にかけて)に自分の才能で街を良くしていこうと、街づくりの重職(住職)を占められています。

その中で、私が何を話せば良いのかということですが、玉ばかりの中に石も要るだろうということで、意志の弱い人間がここに呼ばれ、20 年間のまちづくりの話を 15 分くらいで話せということのようです。

< 若き係長の反乱 >

先程、ベッドタウンという言葉がありましたが、私はベッドタウンという言葉が嫌いです。昭和 50 年に中小企業庁の商業近代化計画を商工会議所と一緒に策定し、その時に、豊中の産業振興ビジョンを作ろうという話になりましたが、「何故、豊中に産業ビジョンなのか」と言われました。某阪急の広報担当者が「駅前大きなテレビでっか」と言うので「あれはテレビジョンでんがな」という話もありましたが(笑)、「ベッドタウンをヘッドタウンにしたい」という思いがあったわけです。

私は役所の中で、企画や行政管理課の仕事

をしていましたが、昭和 53 年 12 月 25 日は豊中のまちづくりにおいてエポックメイキングな出来事がありました。合理化に嫌気がさして、上司に対して、若き芦田係長が反乱をしたのです。人事異動を申し出た時上司に「お前にどんな仕事ができるのか」と言われたので、頭に来て「あなたがやってきたことくらい何でもできる」と言ったところ、12 月 25 日に商工の係長に任ぜられました。当時、商工の係長というと左遷でした。今は「そんなことさせん(左遷)」という意味があるのですが(笑)、この辺りの経緯は「造形」の創刊号に書いていますので、見ていただきたいと思います。

< 産業活性化型まちづくり >

商工課で出店調整を 11 年間務めたのですが、昇格の時に市長の親戚ではなかったのが、役所ではラインとスタッフではラインの方が上という時代がありましたが、私はスタッフ職に位置づけられました。スタッフ職は専門職ですので、何か特定のテーマに取り組もうと考えて、産業振興ビジョンに取り組んだわけです。

そして、商業型のまちづくりや、商業活性化型まちづくりとして、「快適な街に新しい産業が育ち、新しい産業はまちの生活者を快適にする」というコピーを作り、産業とまちづくりの一体化、産業政策と都市政策、流通政策と都市政策の融合を打ち出しました。

しかし、立派な計画ができて、実現しなければ意味がないので、計画実現に最も情熱的な利害関係者が計画策定段階から参加する方が良く考えました。

役所の仕事は、商店街との関わりから言うと、その時までは、商店街ではなくて焦点外活動だったのではないかと思います(笑)。幸い、その地域のタウンマネージャーの候補である商科大学の卒業生がいましたので、これを各駅前地域に入れることによって、彼らをリーダーとしながらまちづくりに励んできたわけですね。

高口： 最初のアピールをしていただきましたが、芦田さんの話は注意して聞いていただかなければ、掛詞や駄洒落としか言いようの無い言葉が折り込まれていて、意味不明になる場合がありますので(笑)、よくお聞きいただきたいと思います。

2. 街の再生に向けての活動の経緯

高口： さて、それぞれの街には、それぞれの経緯があります。皆さんは、10~20 年にわたって、それぞれのまちを何とかしようとしてこられた方々です。

土居さんは、「町街トラスト(まちが いいじゅく)」という、ここにも駄洒落的なセンスが折り込まれているようですが、そういう活動を NPO に申請中ですので、この動きを中心に、どのように何をしてきたかを伺いたいと思います。

町街トラストによる街を生かす活動

土居： 本当は、「まちが いいトラスト運動」と呼んで貰いたいのですが、平成 9 年頃スタートしましたその間 25 年も商店街でそのような活動をしています。商店街とは何なのか、商店主はそこで生きられるのか、しかし、商店主がいなければ、世の中は狂ってしまう、街守りがいなくなる、街の見張り番がいらない商店街は無くなる、そうすると街が壊れる、そういうことばかり考えて活動をしてきたわけですね。

< 町街塾設立の背景と経緯 >

私たちは、商店街に初めて文化を持ち込みました。日本のカルチャーセンターの第 1 号です。行政はその後、それを見て、「そういうことができるなら、イベントにお金を出そうか」とか「ホールの改装にお金を出そうか」と言い始めました。私たちの時にはそういうことがなかったので、そういう意味では、行政

は後からついてくるものだと言えます。したがって、どうすれば、行政の方たちと話をしながら、私たちの言っていることを理解してもらい、それについて協力してもらえるのか、それが私の仕事の一つです。

戦後、昭和 20 年から商店街組織をはじめとして色々な組織が生まれ、既に 50 年経っています。50 年経って、商店街は商店街組織で活性化していかなければならないということに認識しました。

商店街組織の上には経済局があり、商工部があって、何事も商業関係の役所と連絡しながら行わなければならないということをしてきた結果、したいに商店街が沈んでいったわけです。それは、何もしていないのと同じではないかということになります。

では、切り口を変えてはどうか。商店街組織というものの考え方そのものが、もう商店街が対応できない組織になっているのかもしれないので、その枠を超えなければ、商店街が活性化できないような気がしてきました。

例えば、商店街の中だけで、抽選器を置いてガラガラ回しては「1 等が出ました」「3 等が出ました」と鐘を鳴らしていたら商店街が良くなるのかということ、そんなことで商店街は良くなりません。

そこで、線だけを考えるのではなく、円を考えなければならないと思うようになりました。天満の街を全部考えなければ、天神橋筋も良くなるのではないかと。それに今の世の中がおかしくなっているのに、誰かがやらなければならないと、考えるようになったのです。

街は住まなければ傷みます。成松さんが言われたように、街の歴史は、人がそこに住むことによって、その街に愛着を感じるころから作られるものであり、だからこそ、天神祭が千何百年も続いてきたわけです。「自分たちがやらなければどうにもならない」という思いが、祭を仕立てているのであり、金を出

したから祭ができるというわけではないのです。そのように、地域愛を育む、「住む」ということが大事です。

もう一つ、街にとって大事なものは、匂いです。箱だけをつくったのでは、匂いは生まれません。天神橋筋 1 丁目～7 丁目まで 2,600 m を歩いてみると、町ごとに全部匂いが違います。お客さんは、それを感じて「5 丁目と 3 丁目は、全然雰囲気の違いがまんま」と言われます。それが街なのです。その匂いを残していけるかどうかというのが一つの課題です。

さらに、街は「かやくご飯」です。色々なものが街という一つの器の中に盛られています。ですから、いつも温もりのあるホットな街、それを残したいのです。

そのためには、どうすれば良いのでしょうか。組織は破らなければならないし、商業課以外の行政とも連携をしなければならないので、どうすれば良いのかと考えて、結局、天満を好きな人を集めようと思い立ったのです。「大阪の天満は良い街でっせ」「大阪の歴史の中で、街づくりができていた一番初歩的な街なんや」「そういう街を残したいから、天満の好きな人は手を挙げてくれませんか」と言いながら、25 年間色々人と脈を求めたのです。そうすると「やってやろう」という人が出てきました。今、大坂城の名誉館長をされている渡辺さんであったり、落語家の福団治さんだったり、大阪芸大の先生など、色々な人がいますが、その内に高口先生にも協力していただければ有り難いと思っています。そういう人たちと地元商店街の私たちで、何かしていこうと始めたわけです。

< 環境活動と観光活動 >

最初に行ったのは何かということ、後から思えば、世の中に役立つことをしてきました。まず、環境を考え、次に観光を考えました。この 4 年ほどの間に、その二つをやってきたわけです。

環境を考えたいきっかけは、天神さんの神事

である「茅の輪くぐり」です。「茅の輪くぐり」とは、大きな輪を作って、その中を通り抜けると幸せが来るという神事です。その茅の輪を持って来てくれたのは琵琶湖の近江八幡の人たちで、茅の輪には琵琶湖の葦が巻かれています。話を聞いてみると、その葦が葦枯れをしてきていると言うのです。それを聞いて、「これを何とかしよう」と思いました。

葦枯れの原因は、使われなくなったためです。葦簀や屋根葎きに使われなくなってしまったために、放っておくと枯れて水が腐ってしまいます。葦は水中の有機物を全部吸い取って成長する浄化の役割を担っていますので、これが駄目になると、大阪の水が駄目になり、天満の水も駄目になるのです。そこで、私たちは川上である琵琶湖を何とかしようと思い、葦で紙を作って色々なことをしてきました。

そのうちに、布ができました。布を作ってくれたのは、近江商人の伊藤忠でした。これも何かの縁と思いますが、これで買い物袋や土産物を作っています。それによって、環境と観光が結びつく仕組みになったので、これが街活かし、街残しのキーワードになるかもしれないと思い、法人組織にしようと考えて、今、NPOに申請しているところです。

<国際集客都市を目指した仕掛けづくり>

そういうことが次第に広がって、大阪の街中が何か違う形で発展し、残していくことができないかと思っています。

国際集客都市となるためには、やはり住んでいる人間が街思いをしなければなりません。作り物だけでは駄目です。USJや海遊館やWTCなど、大阪の地の果てにばかり行かないで、もっと真ん中に来て欲しい。大阪の商店街は市の財産です。言い替えると、国の大事な資産なのです。それを潰しては駄目です。私の時代に「天神橋筋商店街跡」という碑が立ったら大変です(笑)。

そうならないようにするにはどうしたら良いか。やっている人たちと協力してくれる人

たちで努力すれば、また違う道が拓けるかもしれない。そう考えて、今、一生懸命に取り組んでいます。

それが今、皆さんの共感を呼んでいます。商店街人が仕事をすると、「金儲けのためにやっている」と思われがちですが、最近、色々とテレビに出演させていただいて顔が売れるにつれて、私の顔を見ると「一所懸命にやってくれてますなあ」と言っていただけるようになってきました。商売人という枠を超えるようになったのです。これは嬉しいことです。“ほんまもん”と思ってもらえたように思います。建物でも作り物と本物があります。作り物と本物の共生が街だと思いますが、そのように、本当に地域人として取り組んでいると思ってもらえることが、ある意味では、私の生き甲斐のようなものです。ですから、これだけはもう少しやろう、もう少しやると道が付いてくるのではないかと思っています。

JRの天満宮駅に天満宮の名前を付けてもらうために、3万人の署名を集めました。一番喜んだのは、天満宮の宮司ですが(笑)。通行量が8,000人から2万数千人になったのも嬉しいことです。不景気でもものは売れませんが、そのように街の何かが動いてきたことが嬉しいのです。

よく地域の商店街や街に行くと、素晴らしい城等があって観光客が大挙して押し寄せながら、一歩降りて来て街の中に入ると、商店街はシャッターが閉まっていて誰も人が通っていない、死んでいるような街がたくさんあります。

大阪の街は、天神さんも大事にしなければならぬし、天神祭も大事にしなければなりません。戎さんも、七夕祭りも、色々と歴史や伝統や文化を大事にしなければなりません。それと同じように、今が生きていなければ街になりません。今を生かすことが私たちの役割ですから、それを伝統文化や古いものといかに仕掛けていくか、それが集客都市の

一つにつながっていくのではないかという発想で、一生懸命に取り組んでいるところです。

高口： 有り難うございます。それぞれの方が歴史をお持ちで、それを 10 分で話していただくのは本当に申し訳なく思います。

今の話に少しコメントをしたいのですが、今では商店の旦那がいなくなってしまう、何かにつけて行政にお願いしてやってもらうという情けない状態です。それに対して、文化というものを自分でやろうと決心され、儲かるということだけではなく、色々なことをされて、それを理解してくれる人たちが、それを文化と理解してくれたわけです。

私も別の所で、「大阪の文化の水準を上げて、世界的にするためにどうすれば良いか」という議論に対して、「そんなことは議論するな」「私が文化です。私も文化人、貴方も文化人、そういう人たちが増えると大阪の文化が上がるということではないですか」と言っています。直ぐに行政や国を頼るような情けない状態を文化のない状態だと思っていますが、まさに私が言っているようなことを嘗々と実施されてきたということです。

NPOにはなれそうですか。

土居： 先日、設立総会を行いました。認可が降りるのに 3 ヶ月くらいかかりますので、年末にはできるのではないかと考えています。

高口： NPOという形を核にして、やる気のある人が集まって仕掛けていくというのは、非常に遠回りに見えますが、結局、旦那集団がパワー化していくための活動をされていると思います。

アジアのミラノを目指す

長堀・心齋橋のまちづくり

成松： <長堀 21 世紀計画の会の設立経緯>

私たちの会は、長堀通に地下鉄を引こうと

というのが最初の動機です。そごうの提案で、約 30 年前に、地下鉄東西線都市開発促進委員会という団体が発足しました。当時、大阪の地下鉄は南北線ばかりで、東西線が 1 本もなかったため、南北線を全て縦貫して長堀通に東西線を 1 本通すと、心齋橋に活気が出て人が入って来るだろうと考えたのです。さらに調べて見ますと、大正区と鶴見区はバス路線はあるけれども交通が不便なので、ここに通すと住民も心齋橋に来やすくなって、そごうも大丸も儲かるようになるのではないかという発想も含めて、地下鉄を引こうという運動を 10 年間展開したわけです。

当時、中央通の方々も東西線を引こうという運動を展開しており、中央線と長堀線が引っ張り合いになり、私たちの会も 8 万人弱の署名を集めて運輸大臣の所に持って行きましたが、当時、大阪市の交通局長で後の市長である西尾さんが間に入って、「東西線 1 号は中央通にしたい。私が責任を持って必ず引くので、悪いが長堀通は降りてくれないか」と言われました。そして、彼は助役は間違いなさそうで、市長にもなりそうだとということで、彼に託すところもあって承諾したわけです。

ただし、その時に、西尾さんも偉かったのですが、「赤字の地下鉄ばかりは引かないので、地元の人たちが、たくさんの方が乗りたくなるような街をつくってほしい。心齋橋をリニューアルして、長堀・心齋橋エリアの街づくりをしてほしい」という話が出てきたのです。

そこで、私たちは街づくりに取り組むことになりましたが、提案者であるそごうの、既に亡くなられた竹中正さんはボランティア活動の上手い人だったので、彼が地元の J C の方たちを集めて、南の活性化を呼び掛けてスタートさせたのが 1981 年 9 月でした。ここからは地下鉄を引くだけではなく、都市再開発をしようという長堀 21 世紀計画の会がスタートしたわけです。

そういことで、最初は大丸、そごうがメイ

ンで、地元の浪速商会、オリンピア等、色々な地元企業、大阪J Cのメンバーが立ち上がって始めたわけです。つまり、企業町会ですが、当時の日本には、地元企業が集まって街づくりをしようという例は恐らくなかったと思います。

<長堀カーニバル>

そういう中で、街づくりをすることになり、自分たちで色々と話し合うとともに、市民が大阪をどのように考え、どのように感じているのか、アンケート調査を行うことになりました。その結果は、ほぼ私たちの思い入れと同じで、「大阪は街の中に潤いがない」「もっと緑が欲しい」「花が欲しい」というような答えが出てきました。確かに、東京は日比谷公園や皇居前広場などがありますが、大阪の街は雑然としていてあまり楽しくありません。

そこで、コンサルの都市問題にお願いして、第1回目の提言書を作成しましたが、その内容は、長堀通の四つ橋筋～堺筋までの間を公園にして、その中に野外音楽堂や各種施設を設け、車は地下を通すというものでした。見ていると、通行車両のほとんどが長堀通に用があって来ているのではなく、通貨車両が多いことが分かったので、車は地下を通す案を出したわけです。

これを持って大阪市役所に行き、当時建設局の主任に説明しましたが、その人に照れくさそうな顔で「ところで、長堀は大阪市内ですか」と言われ、愕然としました。長堀は行政の方でもどこにあるかを知らないということに驚くとともに、もう少し長堀という名前を発信しなければならないと思い、何か手立てを打とうということになりました。そこで、名前を上げるには祭りが一番だという話になり、「長堀カーニバル」を10年間開催しました。

その結果、長堀という名前を認識していただけになりましたが、特に有名になったのは、皮肉なことに、第10回目の長堀カーニバルの事故によってでした。照明檜が倒

れ、28名の方が重軽傷となって、ヘリコプターは飛んで来る、機動隊は来る、NHKは7時のニュースで流すという事態になりました。当時は街の活性化の動きが活発になりかけていた頃だったので、「街の活性化も一歩間違うとこんなことになる」という悪い例のように日本中に報道され、それでかなり長堀の名前が有名になったということもありました。

<トップブランドの集積>

そういう中で、長堀・心齋橋の街、御堂筋の街をどうしていくのかということの色々と語り合ったわけですが、そこで、「本来、大阪はアジアの中心のはずだ」「ヨーロッパやアメリカは東京に任せた方が良い」「東京、東京と言わずに、大阪はアジアの中心になろう」ということになりました。

では、例えるところどこになるのかと話し合ったところ、「大阪はパリでもないし、ロンドンでもニューヨークでもない」ということから、端的に言い表すとすれば、ラテン感性があるので、ミラノ的な感じが似合いそうだということになり、アジアのミラノ的なイメージに決まりました。

内容としては、「大阪はお洒落さが足りない」「土・日にカップルでそぞろ歩きする、ワクワクするような街が大阪の中心街にない」という話が出て、これをどうにかしなければならぬということになりました。本来、心齋橋は、日本の中でもその最先端を歩んでいた時期がありましたが、それがいつの間にか後退している部分があるので、「お洒落な大人の散歩街をこのエリアに形成しよう」という抽象的な目標が決定したわけです。

そして、そういう街づくりをするために、地元の企業を通じて、このエリアがアジアの中心になること、地下鉄が4本入っていること、日本最大級1,030台の地下駐車場が街のインフラとして使えること、長堀通の四つ橋筋～堺筋までは国のシンボルストリートに指定されていて、関西では非常に良い通りなる

ということを発信しながら、優良企業に呼び掛けた中で、シャネルが来たわけです。

最初からトップブランドを誘致しようと考えていたわけではないのですが、アジアの中心を作ろうとしていた中でトップブランドが来ることになったわけです。運の良いことに、シャネルが東京と同じくらい資金がかかると考えて3億円ほど用意して大阪に来たので、東京の2倍の敷地を購入でき、一番手で大きな店を出すことになったために、後から来るトップブランドもシャネルに負けないように、ほとんどの店がそのブランドとしては世界最大級の店を構えることになりました。最近開いたカルティエは270坪、アルマーニは400坪と、スーパーブランドでも大型店が集まりつつあり、世界的に見ても非常に面白い状況が始まっています。

それとともに、プラス・オンリーワンとして、大阪の文化、日本の文化を定着させたいと目指して活動を進めています。

高口： シャネルは何故来たのですか。

成松： たまたま、長堀と御堂筋の交差点の南東角のビルのオーナーが大変ブランド好きな方で、年に4~6回は、シャネルをはじめとしてファッションショーに出掛けており、且つ大変に親しくて、「私のビルが大阪の中心にあるので、貴方の所も出店しないか」と声を掛けられたそうです。

一方、元々「御堂筋シャンゼリゼ論」があり、行政も財界も大賛成で、ブランドも出店に乗り出したことがありましたが、けんもほろろに断られたという経緯がありました。したがって、元々ブランドも出店したいという意欲が旺盛だったわけですが、そこにビルのオーナーから話があったということで繋がったのが発端です。

高口： シャネル、マックス・マラー、ベルサ

ーレ、ゼニア、ベルサーチ、ルイ・ヴィトン、カルティエ等、続々と出店していますが、その前に、地下鉄の誘致があり、初期の頃に、藤田邦昭さんのビジョンも出ていますし、浅井謙さんがパースを描かれている等、行政や建築家、そして今中心となっている企業町会が動いています。

私は寺町にいますが、住職を企業の責任者とする、かなり時代遅れの昔の旦那が寄っているような街になっています。しかし、ここは近代旦那がいる所で、そこが街づくりのビジョンを明確にして、将来像に合意され、長堀21世紀計画という形で民間のビジョンが持たれたわけです。そして、そこに近代旦那が集まって来たのです。会員になるには、会員企業2社の推薦を受けて入会申込書を提出し、三役会で承認を受け、月会費3,000円を納入するという、かなり近代的な手法で運営されています。そして、そのしっかりとした組織に行政が参画し、しっかりしている骨組みの上に、トップブランドが大型店を出店したという、一つの非常にユニークな例だと思います。

では、次に、芦田さんにお話を伺いたいと思います。通常、行政は縦割り行政という言葉があるように、それぞれ自分の権限と裁量の枠組みを持っており、その枠組みから外れた、例えばAの縦ラインとBの縦ラインの間にあるようなものは、余所へ回そうとするところがあります。しかし、街づくりは、ほとんどの場合において単純にいくケースが少なく、横向きにつながなければ街というものは全く機能しないと思われるので、かなり難しい中で横につなぎ、それを市民に理解させることが求められます。

この理解させることと、横につなぐことは、行政とは正反対のことですが、芦田さんは、そのように「そういう人が行政の中にいるのは不思議だ」と思われるようなことをされてきました。

それについては、非常に長い話になってしまいますので、私が端折って紹介させていただきました。そして、その横つなぎの話は、まちづくり支援チームという形で実現されたようです。その間、散々色々な所で叩かれているうちに、駄洒落でボディガードするという話術が生まれたのかもしれませんが、なるほど、こういう人でなければ街づくりの行政はできないという感じがしますので、その点の秘訣をお伺いしたいと思います。

豊中市のまちづくり支援事業

芦田：< 豊中市の街づくりの特徴 >

住民参加は、“住民参加(参加)で、成功した例が、アル(ある)カリ性?”と言われるほど難しいのですが、その中で、豊中市のまちづくりの特徴を表現するのが、「みんなの計画、役所の支援」というキャッチコピーです。

これには三つの段階があります。まちの将来像に対する計画作りを役所が支援するのが1番目の段階、その計画が地域関係者の共有になるのが2番目の段階、その計画の実現に役所が協力するのが3番目の段階です。そういうことを、ある意味では市民の側にも課しています。

逆に市民提案権の保証、行政の支援義務、行政の対応義務を、今まで用意してきましたし、今も用意しています。このように、ロマンと算盤の結合を考えながらやってきたわけです。

二つ目に、「夢を形にする力」というキャッチコピーがあります。これは技術力や経済力であり、専門家の力による高い説得力も求められます。

それから、三つ目が「支援(シエン)カンバック」です(笑)。まちの人が頑張るから、後ろから行政が応援するという意味です。役所が線を引いたり、色々するのはあまり良くないと思います。私は「役所の仕事はトイレットペーパーのミシン目」と言っていますが、トイレッ

トペーパーはもう少し欲しいと思う所にミシン目があるので、もう1枚余分に使うことがあります。ミシン目を入れなくてもトイレットペーパーくらい誰でも破れるので、行政は市民を馬鹿にしたようなことをすると、経済的にも損をするし、手間もかかることになります。

「支援と協働」にも幾つかの段階がありますが、これはまた機会があればお話ししたいと思います。

「行政参加」は言葉遊びのようなものですが、市民参加と言いながらも、自分の所に引き込みながらやってしまうので、説明会は説得会になっています。

それから、「人・まち・仕組み・まちづくり」は、まちがつくられる、育てられる、更新されるというプロセスも含めてまちづくりとしており、そういう意味では、格好の良い仕組みを作っている、システムとそのシステムの運用が違うことがあります。例えば、正確な時計を持ちながら遅刻するとか、コンピュータを入れても倒産するとか、口座を開けていても金を入れないので利子が付かないとか、店を開けていても商品を買わずに油を売っているとか、そういうことは駄目だという、手入りの必要性についての話です。

< まちづくり支援チームによる

縦割り組織の横つなぎ >

まちづくりにおける縦割りの横つなぎとして、まちづくり支援室を設けています。まちづくりには色々なセクションがありますが、そういうセクションに「ご縁(5 E)のある一歩手前の支援(4 E)室」ということで(笑)、各セクションの手前で交通整理をしたり、力を付けてもらうような活動をしています。

まちづくり支援チームには二つの機能があり、一つは、元々、産業振興ビジョンを作った時のメンバーで、もう一つは、まちづくり条例を作った後に制度等に関する各専門セクションから来たメンバーです。

現在、23～24名の職員がいますが、課長ではなく、係長クラスです。課長は議会答弁がありますが、係長は議会答弁がありませんので、「私ならこのように答弁するのに」という形で反逆させようという発想です。これが縦割り組織の横つなぎなのです。これは、「長屋の発想」でもあります。

つまり、長屋の裏庭を子どもが走っても怒られないように、裏庭から隣の家の話にも首を突っ込むというのが、余計なお節焼きの縦割り組織の横つなぎです。

まちづくりフォーラムを120回続けており、よその人との関係を見ようとしています。要するに、まちの中の人よりも外の人との交流を図らなければならないと考えています。

それから、「中学・高校生のためのまちづくり講座」も開催しています。(株)PPIの三好さんに昔からお世話になっていますが、この講座は10月28日～12月23日まで2ヶ月間行われ、次の世代のリーダーを養成するとともに、子どもの目から見るまちを見たいという意味もあります。小学生では社会的経験が薄いので、公共性についてなかなか力がつかないだろうということで中学生、高校生を対象としています。

まちづくり実践大学も、メンバーが普段の活動から力を付ける、あるいは自分は説明できないが、周りのサブリーダーをしっかりと教育してもらおう等、同じ建築協会で話をしても、制度の説明、活動の説明等、色々な説明の仕方によって納得できることもありますので、そういうことを延々と続けています。

あとは実現化への道ということで、自分たちが作った夢を形にするには、ある程度、行政計画として位置づけなければならないということです。

市民が作ったまちづくり構想を実現するために、各セクションの課長あるいは次長クラスが一堂に会して、どうするかを議論しながら進めていこうと考えています。市民には調

整能力が少ないのですが、行政は「しないため」の調整能力が抜群に高いので(笑)、これをいかに後ろに下げずに表に出すかというのが苦心する所です。課長クラスの会議の後ろに係長クラスを置いて、時々課長がとろいことを言うと、係長に「どう思うか」と聞いて、職場に混乱を起こし、適度な緊張感をもたらしめているわけです(笑)。

そして、まちづくり構想に対する市の回答をまちづくり基本方針として出すわけですが、これには三種類あります。一つは、市が主体的に進めていくべき事項で、インフラストラクチャーや土地の利用方法についての調整もあります。二つ目は、地元の同意を受けて支援することで、地区の再開発や建物の共同化、住民間のルール作りの支援等です。三つ目は、地元が地元の責任において行うことです。

そういうことをした中で、交通の社会実験を行いました。今は千里ニュータウンの「歩いて暮らせるまちづくり」を進めています。国土交通省の事業名は「街」づくりとなっていますが、「まちと街(がい)では間違いの元」という話になります。また、まち興しという言葉がありますが、まちは起こしてもすぐに寝ますので、誘いに行っても「またお越し(起こし)」と言われる(笑)。

このように、仕組みづくりと、仕事づくりと、施設づくりがありますが、要するに、社会計画、産業計画、都市計画があれば良いと思っています。そういう意味では、中間組織としてのまちづくり協議会と、行政内のまちづくり支援室がパラレルに動くように努力してきました。上手くいったかどうかは、後の人の評価に任せたいと思います。

高口： それぞれのまちづくり、まちを活性化するための努力を報告していただきました。

私も大学を辞めて10年ほどになりますが、その間、住職があまりガツガツしていると人が寄りつかなくなりますので、「趣味のまちづ

くり」と言いながら、花や料理に凝っているのと同じようなレベルで、趣味でまちに関わるような悠然とした顔をしています。

しかし、実はそうは上手くいきません。色々な提案をしますが、やはり建築家、あるいは学者の癖が付いていて、つい「私の案です」と言ってしまうのです。これは、まちに関わる時に、第一義的に駄目なことです。つまり、皆の意見でなければならないのです。

ですから、そういう特殊な点として、土居さんは組織をNPO化し、色々な方とネットワークを組もうとしておられます。恐らく土居さんには土居さんの「私の意見」があたりだと思えますが、頑として言われません。「私たちの意見」と言いますと、「私たち」とは誰かということが重要になりますし、その意見はコンセンサスを得たものでなければなりません。

コンセンサスという点では、成松さんの所では長年にわたって 21 世紀の計画の会を組織し、延々と協議して、まちづくり憲章を作っています。この憲章を一つ一つ見ますと、都市計画の教科書に書いてあるような言葉が並んでいますが、それが皆の意見であり、皆がこの点に合意しているということと、「できれば実現しよう」ということとでは、天地ほどの差があります。このように、コンセンサスという点について、延々と取り組んでこられたのが、恐らく成松さんの仕事だったのではないかと思います。

芦田さんは、まちづくり支援室を作られました。本日は、行政側として出席していただいていますので、ご自分では言いにくいのではないかと思います。色々なことを行政に全面的にお願いするのではなく、何をしたいかを明確に言い、そのために支援をお願いすることが必要です。

ところが、一般的には支援はありません。本日は稀な人に出てきていただいていますので、通常はそうはいかないケースが多いのではないかと思います。しかし、色々と言って

いくと、行政の中にも物好きな人がいるということの実例ではないかと思います。

私が行っている趣味のまちづくりも、結局、支援が必要です。まちを動かそうと思うと、例えば、大阪市という地主が家の前の道路を整備しています。公共というと話が違うように思われますが、市役所の人には「ここはうちの土地です」「お宅はそちら側を考えてください」と言いますから、現実に地主である行政ときちんと話し合いをしなければ、まちはできません。ですから、その点の話を聞かせていただいて、大変に有り難いと思います。

そういうことで、本日のシンポジウムはそういう方々のお話を伺いました。さて、本日の皆さんは建築家という立場、あるいはそれに関わるまちの方々の立場から、一体どうすればまちは動くのかという疑問をお持ちだと思います。恐らく建築家の基本的な発想から言うと、まちという対象はかなり違った対象かもしれません。建築家は「皆の」ではなく「私」を主張しますので、コンセンサスを得ているかいないかは、私に収斂してしまう場合が多いわけです。そして、行政については、非常に無気力であったり、逆に非常に行動的であったりと、なかなか難しい問題があります。

そういうことで、本日は、建築関係者にとっては珍しい方々にお出でいただいて、お話を伺いました。ここで一旦休憩して、その間に会場の皆さんにはアンケート用紙に質問項目を書いていただきたいと思います。

討 議

街の賑わいの減少に関する意見交換

高口： 1 点だけ質問をいただいています。「幹線道路に沿ってマンションの立地が増えているが、1 階が駐車場でひっそりとした街並みを形成しつつあり、街の衰退を進行させている。規制を強化する方法はないのか。ま

た、現在の大阪市内の街づくりの野放図な進め方への意見を伺いたい」という質問です。

これについては、まず芦田さんに感想などを伺いたいと思います。マンションが増え、駐車場が増えると、まち自体がガランとしてしまうのではないかと、賑わいや住むことを考えるべきではないかというご質問です。

芦田： その通りだと思います。

高口： 土居さんは、どのように思われますか。

土居： 確かに、空き地や駐車場は賑わいにつながりません。もう一つ、地面が駐車場になって、車社会になってしまうと街につながりません。街は土の上であり、地下街はまちではありません。人は街の下に街をつくらずというくらい、今は地上がおかしくなっているのです。ですから、地面(地べた)に視点を置いて考えていただくと、もっと面白い街ができると思います。

高口： 有り難うございます。この問題に関連して話したいのですが、私は京都大学や奈良女子大で都市計画や建築設計について教えていましたが、その間、教えながら違和感を覚えていたことがあります。それが今、奇しくも土居さんが言われた地面(地べた)ということです。

つまり、超高層建築を考える、人々は飛行機で飛び回る、グローバル化する、情報は携帯電話で伝達され、状況が変わっていく、こういう都市をどう考えるのかということが、恐らくこの何十年間かの建築、都市計画の問題ではなかったかと思えます。

これは言い替えるならば、空中文明とでも言うべきものです。従来、人間にとって空中は全く問題ではありませんでした。ところが、突然、空中権などという権利が問題になるよ

うな時代がやって来ました。その中で地面(地べた)の上で営々と築き上げられてきたこれまでの文明や文化は、あまり顧みられないようになってきました。

実は、ワールドトレードセンターに飛行機が衝突したニュースを、私はトルコで見ました。トルコ語に翻訳されたCNNニュースは何を言っているのか分からなかったので、何が起こったのか分からないままに画面だけを見ていると、余程、空中文明に恨みを持っている人間が何かをしたように見えました。何の情報も無しに画面だけを見ていると、私もこういう感じの人間なのかもしれない、衝突する側にいるかもしれないとも思いました。

例えば、イスラム教や中東地域など、色々なものが過去の怨念のようなものを抱いて存在しています。それと今日の話結び付けるのはあまりにも距離のある話なので、これに関しては議論しませんが、拡大解釈するならば、街の賑わいや環境などが色々と問題を起こしている遠因の一つとして、我々の技能そのものがあまりにも空中文明化し過ぎたのではないかと考えられます。

したがって、ここで“地べた文化”を取り戻そうとは思いませんが、話を伺っていると、私も含めて、ここにおられるお三方は、ウサマ・ビン・ラディン型の人々と言えます。そして、多くの建築家は、私に言わせるとブッシュ型だと思うわけです。この例えをこの時期に論議するのは不適切な話題ですが、そういうかなり根深いものを持っているということを示し上げたかったわけです。

商店街への修学旅行の誘致について

高口： 土居さんの所では、大阪市の観光課とタイアップして、修学旅行誘致を実施され、富山県から修学旅行の学生たちを受け入れたと聞いています。これはあまり誰も思い付かないような話だと思いますが、どうだったのか、今後どうするのか、伺いたいと思います。

土居： 町街トラストの組織の中に、観光に
関係のある役人がいますので、色々話をし
た中で、大阪の観光は京都の2倍ほど人が来
ている割に都心があまり見られていない、ま
ち文化が少ない、大阪弁も含めて、私がよく
言う「人情」と「まち思いの心情」と「商売繁盛」
という町商人(まちあきんど)の三箇条など、
大阪の味がなかなか伝わらないという話が出
ました。

しかし、それは次の次の世代のために伝え
なければならないという発想から、大阪の街
の良さ、大阪弁の良さを伝えたいと考えまし
た。大阪弁は絶対に人の気を悪くさせない商
売用語なので、『『おおきに』は単に『ありが
とう』という意味ではなく、『多いにありが
とう』という意味なので very much が付いてい
る』というような話をしたいと考えて、誘致を
始めました。

そうしたところ、これが非常に流行ってし
まい、今朝も高校生が40人ほど来ていまし
た。本当にたくさん来るようになり、私たち
だけでは整理できなくなったので、道具町
の方にもお願いしたいです。窓口はある旅
行会社にまとめてお願いし、こちらの主旨と
受け入れ可能な人数、できる内容を伝えて、
当てはまる所を選択してもらうようにしてい
ます。

ところが、旅行シーズンになると非常にた
くさんの学生が来ます。それ程、学生にとっ
ては新鮮なのです。「近所にはスーパーとコン
ビニしかないのに、商店街なんて見たことが
なかった」「街のことなど全然分からない」と
いうような人たちに、もう一度地域を思い直
してもらい、「皆が大きくなったら、街を大事
にせなあかんで」と伝える仕組みを作ったわ
けで、これが非常に大当たりして、やや当り
過ぎの感もあります。

こちらに来て話を聞き、大阪弁も聞き、町
商人の心得も聞いて、実際に体験するために

店に2~3時間張り付くのですが、圧倒的に
希望者が多いのはたこ焼きとお好み焼きです
(笑)。茶碗屋には来てくれません(笑)。

ところが、そうして話をすると、皆が面白
がり、楽しがっています。これが本当の授業
です。後からきちんと礼状が来ますが、皆喜
んでいます。高知県のある学校からは、「修学
旅行ではなく、課外授業にして3年間は必ず
行く」という話が来ました。先日、2年目が終
わり、今度は向こうに行って、母親たちに街
の思いを話して欲しいと言われていたので、
四万十川まで行かなければなりません(笑)。

このようにして、我々の世代と孫のような
世代がつながっていくのは、大阪人にとって
非常に嬉しいことです。そして、商売人とし
て、まち思いの人間として、それが日本全体
に広がっていく仕組みができると良いと思い
ます。

それも含めて観光課とつながったり、IT
で地域瓦版を作る予定で経済産業省から少し
資金を受けたり、色々なことを考えていま
すが、やはり独自に発想した方法が当たって
います。

長堀・心斎橋の

ショーウィンドフェスティバルについて

高口： 成松さんの方は、トップブランド店
が次々と進出して、既に目的は達したのでは
ないかと思います。また、ショーウィンドフ
ェスティバルを開催されていますが、これは
どのようなもので、どういう意味があるのだ
でしょうか。

成松： ショーウィンドフェスティバルは、
今年で3回目になりますが、年末に大阪の季
節イベントとして作ったものです。よくニュ
ースで「銀座のソニータワーにクリスマスツ
リーが飾られた」という話題が取り上げられ
ますが、大阪にはそういうものがないので、
そういうものに育てたいと考えたわけです。

その中で、観光資源としてトップブランドは使いやすいと思います。表現は悪いのですが、トップブランドは、一つの客寄せパンダという感じで捉えておまして、非常に分かりやすいと思います。行政からは「何故日本のブランドではなく、カタカナの名前の店なのか」という指摘があり、一般の方からも「もっと国内のブランドを大事にしろ」という意見がありますが、一般市民に対して非常に分かりやすい切り口であることは拭えないと思います。そういう意味で、トップブランド、スーパーブランドを(活用させていただいています)。

実施して分かったことですが、トップブランドが一堂に会して会議を持つということは、世界的に見ても今までなかったようです。集まってもらくと、全員が「この分野ではわが社が世界一」と思っていることが分かりました。ですから、第1回の時にショーウィンドコンテストという形で開催したところ、トップブランドから「我々は審査する側にあっても、審査される側にはない。勝手に順位を付けられると本社からお叱りを被る」という指摘を受け、急遽、市長賞や知事賞、理事長賞など色々な賞を作って全部を表彰し、順位を付けなかったということがありました。

そして、第2回目からはフェスティバルつまり祭という形にして、街の盛り上げをすることになりました。昨年はシンプルに行いましたが、そういう面では盛り上がり弱かったので、今年は併設で、国土交通省にお願いして、御堂筋絡みのイベントと並行したり、あるいは、別の角度のイベント、例えばワールドカップとの関連等も意識しながら、イベントを盛り上げようと考えています。

苦労しているのは、情報の発信の仕方が難しいということです。マスコミも1回目は取り上げてくれますが、2回目からはあまり取り上げてくれません。要は、大阪の恒例の祭を作りたいという主旨で取り組んでいます。

豊中市のその後の取り組みについて

高口： 私は先程来、「行政には頼るな」という話をしていますが、実はそういうことはありません。私に「もう私がやるしかない」と思わせたのは、大阪市のある人です。

私が取り組んでいる寺町のエリアは、元々大阪市が都市計画で決めた風致美観地区です。公園的な将来像もあり、都市計画公園地区という計画も乗っています。それにも関わらず一向に良くならないので、私は親しい関係者に、いつになったら出来るのかを尋ねたのですが、すると「それは地元から声を出して貰わなければならない」と言われました。それで「そう言えば私は黙っていた」と思い至り、そこで、自分で声を出そうと思ったのが、色々取り組むようになった発端です。

したがって、地主双方のやり取りの中でまちができていくというのが、ごく自然な実態です。私は民間の地主であり、前にある道路の別の地主が行政であるわけですから、互いに話をすればできるということです。基本的な認識をそういう所にスライドさせていかなければ、まちづくり、活性化はできないと思います。行政は市民側が追求したものに公僕として嘗々と取り組まなければならないと思っていたら、恐らく何もできないと思います。

ですから、「私が文化だ」という意識とともに、共につくっていくことが根本的に大事だと思いますが、それを芦田さんは行われているわけです。

さて、芦田さんは、色々な準備室を作られて、さらに教育的なイベントも行っておられますが、その後の経過はいかがでしょうか。

芦田： 普通は、地元から計画が出されたら、「行政の方で実行して欲しい」と言って終わってしまうのですが、出された計画はそれなりの手続きを踏んで、行政の計画としてオーソライズしなければならないし、しかも行政が

できない部分まで引き受けるのは基本的に間違いだと思います。

そういう意味では、交通の社会実験を行って、市民に、自分たちの作った計画が実際に動いた時にはどうなるのかということを経験していただくと考えています。従来の制度では、一旦計画ができると、それを実施するか、しないかという形で終わってしましますが、そうではなくて、国の制度による補助金等を使って、とことんまで走っていくことになると、危なくて足を踏み出せないの、社会実験を行って、計画の内容を吟味して人の動きを変えても上手くいかなければ、最後に道路や建物等を変えていかなければならないというところに話が行き着くわけです。

そして、ハードの話では、道路についてはどういう形でつくる方が良いのかということ、今検討しているわけです。そして、議会の巻き込みながら、政策の優先順位を高めていく。しかもそれは、市民の意見であり、行政もそれに対してオーソライズしているわけですから、そういうことを積み重ねているというのが一つです。

現在、大手前にある国の出先の各局が、近畿広域戦略会議を設けて、幾つか出ているアイデアをどのような形で応援すれば良いか、現場を見ながら取り組むという話が進んでいます。

ただ、千里ニュータウンの建替でもそうですが、住民による規制が強くて、それに対して行政が臆病になっている部分があります。そういう意味では、やはりしっかりした実験を積み重ねて、住民側の理解も得なければなりません。したがって、まちづくりフォーラムや産業まちづくり研究会(通称、さんま研)等、色々な会を積み重ねながら取り組んでいるのが実状です。

寺町におけるまちづくりの取り組み

高口： 予定の時間になりましたが、最後に、

寺町のスライドを用意しましたので、ご覧いただきたいと思います。

<スライド>

寺町周辺には、上町台地の崖や、鬱蒼たる緑がありますが、あまり知られていないので、これを見えるようにすることがテーマです。

風致地区、都市計画公園地区の中には、歴史的遺跡等、歴史的なメモリアルの部分がたくさんあります。

下寺町から見ると、裏には崖や森がありますが、そういうものがあることさえ忘れられています。門は閉じられていて、中に入ることとはできません。

安居神社は、真田幸村が討ち死にをした場所であり、菅原道真が立ち寄った場所でもあります。落語にも出てくる天神山が裏に隠れています。この横には天神坂がありますが、この度、大阪市が整備してくれましたので、言えば、良くなるようです。

その他、大江神社などにも歴史を感じるようなものが隠れていますので、これらを顕在化するために、毎年、「なにわ人形芝居フェスティバル」を開催しています。私も駄洒落が大好きなので、「冥土イン寺町」と言っています。

口縄坂も少しきれいになると、絵を描く人が来るようになりました。このように、大したことをしなくても結構きれいになります。

また、坂を挟んだ両方の寺の塀も美観の問題があります。

天王寺の七坂と言われるように、坂がたくさんありますが、その存在や、それに接している寺などを総合的に良くしようと考える地図を作り、このエリアをベースとして「なにわ人形芝居フェスティバル」を開催しています。

この付近には寺が 25 軒ほどありますが、それらを焚き付けて、徐々に NPO のような形に移行しつつあり、住職だけではなく、それ以外の方も大いに参画していただこうとしています。

應典院という劇場的な寺ができましたが、

それと一心寺の間をつなぐ形で色々取り組み、歴史の散歩道等の既存のものも巻き込みたいと考えています。

計画としては、寺側へ、寺の塀の横に木を植えて欲しいとアピールしています。そして、歩道を広げます。また、かつては天王寺の七名水と言われ、色々な所に泉が来ていました。それがもう出なくなったと思っていたところ、実は出ることが分かりましたので、その水も活用する方法を考えています。

それぞれの寺で努力する目標としては、ブロック塀をやめて上に半瓦を乗せるだけでもきれいになります。住職が檀家総代と相談できるように、メーター当たりの費用も出しています。また、汚い塀も木で覆うときれいに見えます。そのように塀の上に少し飾りを付れたり、横に木を植える等、色々な方法を提案しています。

防犯対策としては、安全な柵のガードも重要です。

また、美観的な問題として、マンションの洗濯物の中に入れてもらうようにしています。

このようにして、「なにわ人形芝居フェスティバル」で色々ルートを回ることを始めました。色々な方が協力されています。

今日のお話を伺いますと、私がこれを始めてからまだ4~5年にしかありませんので、偉そうな顔はできないという感じがします。ここにおられる方々は、10年、20年という単位で活動を続けておられるので、私としては良い勉強をさせていただきました。

本日は、土居さん、成松さん、芦田さん、お忙しい中をお越しいただきまして、本当に有り難うございました。時間不足で、もう少し時間がなければ話せないと思っておられると思いますが、私たちとしましては、大変良い勉強をさせていただいたと思っております。どうも有り難うございました。

閉会の挨拶

委員長： どうも有り難うございました。お手元に昨年のセミナーの講演要旨をお渡ししていると思いますが、本年もこのように講演要旨の形でまとめたいと思っております。本日のお話もご確認いただければと思いますが、何となく、まちづくりのキャッチフレーズ集、あるいは掛詞集、または駄洒落集とでも言えるような本になりそうな気がします。

しかしながら、建築家とまちづくりは、「私」と「私たち」の違いであるという話がありましたが、例えば、土居さんの話の中にあった「まちは住まないと傷む」という話は、「家は住まないと傷む」ということと同じです。「まちはかやくご飯」という話も、「集合住宅は寄せ鍋」とも言われますので、基本的な所は同じではないかと思えます。

それから、本日は特別フォーラムという形でしたが、10月4日以降もまちづくりセミナーは続きますので、是非ご参加いただきたいと思えます。因みに、次週10月4日木曜日は市浦都市開発建築コンサルタンツの富安先生に「居住環境から見る21世紀の都市問題」というテーマで講演していただきます。その後、徳島のNPO法人である中村さんという方から「川からのまちづくり」についてお話しいただきます。その次は、建築だけではなく、再開発も手掛けられている出江さんに、ドイツのポツダムと日本を比較して話していただきます。その他、長浜のまちづくりや、最近話題になっています集合住宅の再生について等、そういう話題が続いておりますので、是非ご参加いただきたいと思えます。

もう一つ、近畿支部の都市デザイン委員会と大阪絵はがき研究会が共催して、「大阪にはるく絵はがきがないので、絵はがきを自分たちで作ろう」という主旨で作られた試作品の展示会を、本日まで北新地の駅の曽根地下広場で開催していました。近畿支部のイベントの最終日である11月29日にサンライズビルのホワイエに展示しますので、是非ご覧

ただきたいと思います。

それでは、土居年樹さん、成松孝さん、芦田英機さん、最後に高口先生、どうも有り難うございました。これで本日のフォーラムを終わらせていただきたいと思います。どうも有り難うございました。

以 上